［研究報告］

要介護高齢者の就労支援の事例にみる地域ケアへの貢献
― 対象の捉え方とケア方法から ―

山口初代[1)]、大湾明美[1)]、田場由紀[1)]、砂川ゆかり[1)]

抄録

本研究の目的は、要介護高齢者の介護予防活動における就労支援の具現化による看護職者の役割拡大のために、要介護高齢者の就労支援の事例について、対象の捉え方とケア方法を分析し、地域ケアへの貢献の可能性を考察することであった。研究参加者は、要介護高齢者を就労につなげた支援者であった。方法は、要介護高齢者を就労につなげたケアについて半構造化面接調査を行い、「要介護高齢者の捉え方はどのようなものか」、「要介護高齢者のケア方法はどのようなものか」の問いをかけ、質的帰納的に分析した。対象の捉え方は、【言動の意味づけを転換】、【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】、【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】が導かれた。ケア方法は、【既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場を発掘】、【できることで協働し、要介護高齢者の就労の見える化】、【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】が導かれた。要介護高齢者の就労支援の事例にみる地域ケアへの貢献は、問題行動ではなく強みとして捉える対象の捉え方で、〝地域性〟を生かし、協働でとりくむケア方法により実現する可能性が導かれた。

キーワード：要介護高齢者、就労、地域ケア

Key words: older individuals requiring long-term care, employment, community-based care

Ⅰ．はじめに

我が国は、世界に類をみない超高齢社会を迎え、支え手・受け手の関係を超え、誰もがともに生きられる「地域共生社会」の実現をめざしている。これは、要介護高齢者であっても生きている限り、社会の構成員として参加することの実現である。 そのためには、それぞれの日常生活圏域で、要介護高齢者を含めた地域に暮らす住民同士が、活動を通して、つながり合い、支え合う地域ケアが必要であるといえる。

M.Bayley（1973）によれば、地域ケアには、家族でのケア、あるいは、効率性を優先し、入所施設や病院内でのケアが行われ、地域でのケアのない段階（Care out of Community)、施設サービスや在宅福祉サービスが制度化され、地域の中でケアが行われる段階（Care in the Community)、社会サービスに加え、地域で暮らす住民による住民のための活動で支え合いが成熟した段階（Care by the Community）があると述べている。M.Bayleyの地域ケアの段階から、我が国の高齢者ケアはCare by the Communityを志向していることを整理した大湾（2021）は、地域ケアについて、当事者のニーズを中核に、支え合いを見出し組織し強化する活動であることを述べている。そして、不利性克服ではなく有利性伸展の対象の捉え方にもとづく、地域ケア創造の看護実践例を示している。したがって、地域ケア誕生の背景にある個別支援について、その支援者の対象の捉え方を基盤にしたケア方法を学ぶことで、地域ケアの方略が得られると考える。

ところで、高齢者の社会参加の最も高いレベルとして、働くことが位置づけられている（Levasseur,2010；小林,2015)。働くことは、豊かに老いるサクセスフル・エイジングの実現のための条件の人生への積極的関与でもある（Rowe,1998)。そして、ヘンダーソン（1960/2016）の基本的看護の構成要素には、患者の生産的活動あるいは職業を助けることがあげられている。このように、要介護高齢者であっても、就労できることの支援は、要介護高齢者本人にとっては豊かな老いを生きることにつながり、看護職者の基本的看護にも位置づけられている。したがって、看護職者も、要介護高齢者の就労を支援していく必要がある。

要介護高齢者の地域ケアには、要介護状態の改善・重度化予防のとしての介護保険サービスがあり、介護予防活動に位置づけられる。そして、介護予防活動には、健康づくり、生きがいづくりだけでなく、就労を含めた活動の推進の必要性が述べられている（高齢者介護研

1）沖縄県立看護大学

究会 , 2003)。しかし、著者ら（2018）が、看護職者の介護予防活動の国内文献を検討した結果、看護職者が行う介護予防活動は健康づくりと生きがいづくりが主であり、就労についての報告は見いだせなかった。岩永（1995）は、健康はそれ自体が目的ではなく、人が幸せに生きるための資源であり、保健の分野のみでは実現できないとしたヘルプロモーションの概念をふまえ、健康づくりを目的とせず、保健活動の出発点として未来の「あるべき姿」をまず明確にすることを提唱している。「あるべき姿」とは、保健活動においては、最終目的のことであり、個々の要介護高齢者においては、個人が求めるありたい姿を明確にすることといえる。このことをふまえると、要介護高齢者の介護予防活動を健康づくりや生きがいづくりで完結させず、就労につなげる手段と位置づけ、看護職者は要介護高齢者の就労を実現する地域ケアを模索する必要があると考える。

今回、研究者らは通所介護を利用していた要介護高齢者が、専門職主導のつくられた役割の提供ではなく、要介護高齢者のニーズに基づき、これまで培ってきた強みを活かして他者の役に立ち、地域住民の支援を受けながら、就労し賃金を得ている実例に出会った。要介護高齢者の就労支援には、どのような対象の捉え方に基づくケア方法があったのだろうか。これらを明らかにすることは、看護職者が要介護高齢者の就労を実現する地域ケアの方略が得られると考える。

本研究の目的は、要介護高齢者の介護予防活動における就労支援の具現化による看護職者の役割拡大のために、要介護高齢者の就労支援の事例について、対象の捉え方とケア方法を分析し、地域ケアへの貢献の可能性を考察することである。

なお、地域ケアとは、大湾（2021）の定義の「当事者のニーズを中核に、支え合いを見出し組織し強化する活動」とした。

Ⅱ．方法

1. S 介護事業所の概要

S 介護事業所は、沖縄県の複数離島で構成される T 町において地域密着型の指定をうけており、その活動地域は人口 500 人余となる H 島である。島は海路のみで主島とアクセスでき、主産業は農業（サトウキビ）と観光業（民宿経営）である。行政機関は出張所があり、主島にある役場から通いの保健師が 1 名配置、医療機関は県立診療所が 1 カ所あり、医師、看護師が 1 名ずつ常駐している。

H 島は介護保険制度が施行された平成 12 年、沖縄県の多くの離島が直面していた“保険あってサービスなし”という課題に寄与すべく立ち上げられた「沖縄県離島･過疎地域支援事業」のモデル地区に名乗りを上げた。本事業は、県、大学、自治体が協働で住民が生涯にわたり住み慣れた地域社会で安心して生活し続けられるよう、住民の主体的な活動による島づくりを支援することを目的とし、5 年間の取り組みを実施した。S 介護事業所は、その事業の成果として地域住民が対話と合意の繰り返しにより立ち上げた NPO 法人が運営している。NPO 法人の活動は、島で生じる高齢者の生活課題に対することで多岐にわたる。例えば過去には、足腰が悪く移動手段をもたない高齢者のための「ゴミ出しボランティア」、徘徊により迷子になってしまう高齢者のための「島丸ごと認知症サポーター養成講座」の開催、島外の施設に入所した高齢者のための「ふるさと訪問」、要介護高齢者が主役となる地域まつりの開催、高齢者が活躍することを趣旨とした港売店（以下、売店）の開業と運営、利益を地域に還元するための地域通貨の発行などである（大湾 , 2021）。今回の実践は、売店で要介護高齢者の就労を実現させた。

2. 就労が実現した要介護高齢者の概要

B 氏、80 代の女性、息子夫婦との同居世帯。障害高齢者の日常生活自立度ランク B １、認知症高齢者の日常生活自立度ランクⅡ a、要介護 2 である。

島で生まれ、結婚し、農業に従事しながら子育てをした。60 代よりひきこもりがちとなり、認知症症状が出現、S 介護事業所の通所介護を毎日利用していた。通いでは、本来のおしゃべり好きが利用者仲間にうるさがられトラブルが絶えないほか、トイレ介助に抵抗し失禁を繰り返していた。しかし、気分転換に訪れた売店では穏やかに過ごしており、B 氏の居場所として相応しいと、今回の研究参加者である支援者から売店の店長に、計算はできないが、客との会話や商品の紹介はできるので売り子として活用してもらうことが相談された。店長は快く受け入れてくれ、B 氏に支援者から「仕事として売り子をしてみませんか？お金も出ます」と説明されると、嬉しそうな表情で「やってみる」と応え、80 代になって人生ではじめて雇用関係を形成し就労している。

就労の場での支援は、B 氏を朝、自宅で迎え、家族から薬と着替えを預かり、出勤に始まり、夕方、同僚と一緒に帰宅する。売店では、島の民具を用いた昔の暮らしや農作物の調理法を観光客に紹介するなど、若い従業員では対応できない売り子としての接客を担う等、週 3 回、出勤している。B 氏の接客は、来店した観光客からお礼の手紙や贈り物が届くなど評判が良い。また県外での販売イベントへ売り子として参加するという新しい活動にも挑戦している。S 介護事業所による就労のための支援は、売店の同僚に送迎を依頼していること、昼食は、S 介護事業所から売店に弁当を配達すること、排泄を失敗したときに、着替えなどを持参しての更衣や床の汚れの始末、法人の最低賃金で給与の支払いをしている。

3. 研究参加者の概要

研究参加者は、40 代の女性、NPO 法人の職員である。会計、資料の作成、理事会への提案など事務能力を活かし多機能に法人内で役割を発揮しているほか、介護の専

門職ではないが、10年あまり、島の住民とともに暮らし、NPO法人で高齢者のパソコン教室講師や要介護高齢者の送迎など、できる役割で高齢者ケアの補いを担う。今回はNPO法人の事業のひとつ、売店の理念を実現する管理者として、B氏の就労の実現に中心的な役割を果たしたことで研究参加者として選定された。

4. データの収集

データの収集は、半構造化面接調査で実施した。面接は、B氏が就労に至る経緯について自由に語るよう促した。そして語りの中に見いだされたB氏へのケアについて「B氏に対して何をしたのか」、「それはなぜ行おうと思ったのか」、「B氏の問題行動をどのように受け止めたか」、などを問いかけた。面接調査の内容は、本人の許可を得てＩＣレコーダーに録音し、その内容について逐語録を作成した。面接調査は、2019年6月に2回（合計70分)、対面にて実施した。

5. データの分析

データの分析は、まず逐語録を精読し、B氏の就労を実現した支援者の実践について、研究参加者のケア内容とその理由や課題への対処の場面の語りを取り出し、12場面の要約を作成した。つぎに場面の要約から「B氏の捉え方はどのようなものか」、「B氏の就労を支援するケア方法はどのようなものか」の視点でキーセンテンスを作成した。そして、それぞれ要介護高齢者の捉え方と、そのケア方法として、類似した内容を集め、サブカテゴリー化、カテゴリー化した。さらに、要介護高齢者の捉え方とそのケア方法のカテゴリーの関係を検討し、要介護高齢者の就労を支援する地域ケアへの貢献の可能性を考察した。

なお、作成した要約は、研究参加者に戻し、加筆及び記載内容にずれがないかの点検を依頼し、確認した。また、データ生成・分析は、共同研究者で合意が得られるまで討議した。文中の、“　”はキーセンテンス、〈　〉はサブカテゴリー、【　】はカテゴリーを示す。

6. 倫理的配慮

研究参加者に対し、参加は自由意思に基づくこと、個人情報は守られること、参加の同意後も撤回が可能であることなどを文書と口頭で説明し、同意を得た。また、面接内容のうち、記憶があいまいなものは無理に思い出さなくていいことなどを説明した。本研究は、研究代表者の所属する大学の研究倫理審査委員会において承認を得て実施した（承認番号19001)。

Ⅲ．研究結果

1. 要介護高齢者の捉え方（表１）

要介護高齢者の捉え方は、37キーセンテンス、11サブカテゴリーから、【言動の意味づけの転換】、【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】、【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】という3カテゴリーが導かれた。

1)【言動の意味づけの転換】

B氏は、通所介護では、“介護サービスの利用者仲間に自分から近づき、同じ話を繰り返し、口論になることがある”（場面１）が、人と関わることを辞めないため、問題行動である〈口論は人と関わりたい思いの表れであり、他者には拒絶されていない〉と意味づけられた。一方、“介護サービスでは利用者仲間と口論となっても、気分転換のドライブで売店を訪れると、直前の口論が嘘だったかのように不快な気持ちを引きづらない”（場面１）ことから、〈ケアの場により言動は変化（する)〉していた。そのため、売店で過ごす時間は少しずつ様子をみながら延ばした。また、“売店では介護事業所と同様に水たまりをつくるほどの尿失禁をするが、客も店長も困らせることはないので、問題ではない”（場面8）と〈当事者が引きづらないことは問題行動ではない〉と思えた。このように、【言動の意味づけの転換】する捉え方をしていた。

(場面1)

B氏は認知症ではあるがおしゃべりが上手なので、売り子の候補にあがっていた。また介護サービスの利用では、歌を歌ってテレビを見るなどしかしておらず、B氏のできることが活かされていないと思っていた。きっかけは、B氏が通いの利用者と喧嘩を繰り返していることであった。B氏は認知症の低下があり同じ話を繰り返すが、いくらしゃべっても相手が返事をしないので、口が達者なB氏は怒って口が止まらなくなり、職員が介入して怒りを静めるという繰り返しであった。B氏のおしゃべりをきっかけに口論になるので、気分転換に売店へのドライブへ誘い、数時間を売店で過ごしてみた。B氏は怒っていたのが嘘のように穏やかになり、帰りたいと希望することもなく穏やかであった。また介護経験のある店長も受け入れがよかったので、店長に見守りを依頼した。このことをきっかけに、B氏が売店で売り子として参加できる可能性があるか試してみようということを店長と話し合い、通いの利用時に定期的に売店で過ごすようになった。

(場面8)

おむつをしていても、椅子の下に水たまりができるほどの失禁であるが、船が出航し、客の出入りが少なくなったときに、誰にも気づかれないようにトイレに誘導して、ゆっくりとモップがけをしているようである。それまでは、目立たないように新聞紙をひいて対処している。失禁する前にトイレ誘導できればいいのであるが、B氏は歩きたがらず、濡れたズボンを手で触ってみて失禁に気づきようやく誘導にのってくれる。尿臭も気にならないので、今の方法で対処している。尿失禁をしてもB氏は途中で帰ることなく、着替えて閉店時間まで売り子を続けている。尿失禁をしても欠勤することなく売り子を続けている。

2)【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】

売店での役割は接客、レジ、商品管理があるが、売店でもっとも重要な接客の役割が担えるので、〈島の暮らしで培った能力を見いだし就労に生か（す）〉してほしいと思った。そのため、“売店までの移動や、レジ、商品管理の業務は、若い定員が補えば、売り子の役割は担え（ると思う）”（場面 1）、〈要介護状態であっても〝できること〟で雇用関係を築くことができる〉と思えた。また、毎日尿失禁があるが、介護経験のある店長の協力を得ながら、〈島の狭小性を生かし、必要な介護は介護事業所が出張により対処すればよい〉と思えた。B 氏は売店の売り子として、売店で定期的に過ごす時間をつくると、休憩時間を忘れるほど楽しみ、客や就労仲間からの苦情がないどころか、観光客からお礼に手紙や贈り物が送られてくる。このように、【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】をする捉え方をしていた。

(場面 1)

野菜や商品の生産で参加するだけでなく売店の運営にも高齢者が参加できないか模索していた。なじみの高齢者数名に売店の売り子を引き受けてもらえないかと声をかけてきたが、売店に出勤するための移動手段がない、レジの操作ができない、接客ができないなどを理由に断られてきた。売店には若い従業員がいて、すべての業務はできるので、高齢者にはできることで参加してもらうことを店長と話し合った。移動手段が確保できていることと、お客さんとコミュニケーションをとることができれば、売店の売り子として運営への参加が可能であると想定して、候補になる高齢者のイメージを拡大した。通所介護の利用者は、送迎のサービスがあるので、移動手段が確保できることから、利用者の中でコミュニケーションがとれる人に目星をつけて、売店の運営への参加に挑戦しようと考えていた。

3）【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】

売店で売り子をすることがボランティアではなく雇用契約を行い、給料が支払われるようになると、家族に経済的に依存していた B 氏にとって、売店の売り子としての“給料で、診療費や介護費用にもあてがえるようになると、家族の経済的負担が軽減し、家族関係に変化につながっている”（場面 11）という〈〝できること〟が増えれば家族関係も良好に向かう〉と思えた。また、“B 氏は、収入を得たことで、小遣いができ、介護サービス利用者仲間に差し入れをするようになった”り（場面 11）、“給料が入ることを想定し、売店の商品の買い助けする”（場面 11）など〈〝できること〟が増えれば他者への気遣いが芽生え支え手になれる〉と思えた。そして、“島では元気なうちしか働けないという考えが浸透しているので、B 氏が経済就労をしていることを一人でも多くの人に伝え、要介護状態でも働ける事例として示す”（場面 6）という私が老いたことを想定して〈我が事として要介護状態になっても就労する生き方を学（ぶ）〉んでいた。このように【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】をする捉え方をしていた。

(場面 11)

給料の支給は、最初は全額 B 氏にあげていたが、店番をしながら、全部使ってしまっていた。何度も同じ商品を買ってしまったり、買った商品は、自宅の押し入れに詰め込まれて、嫁から注意されていた。店長が、「この間も買ったよ」と諭すが、使いたがることから、給料を私が預かり、１０００円程度の少しづつ渡すように変更した。また、これまで介護サービスの利用料や医療費は息子が支払っていたが、家族に負担させることなく自分で支払っている。今はおむつ代も支払えるので、嫁は助かると喜んでいる。事業所では、「暑いね。みんなでアイスでも食べようか？買ってきて」といい、事業所介護職にお金を渡して、利用者仲間にアイスを振る舞うこともある。歩く機会をつくりたいので、「一緒に買いにいこう」と誘うが、「いいえ、私は足が痛いからいきません」と断られる。

(場面 6)

島の人は、元気なうちしか働けないと思っていて、介護を受けていても、お金が稼げるということを島の人達に見せたかった。実際には、要援護高齢者がお金をもらって売店で働いているというのは知られていないので、給料が出ている仕事だということを今後アピールしたいと思っている。毎月発行している NPO 法人の通信の売り子募集の欄には、「時給もあります」ということを示しているが、要援護高齢者がこれに含まれているということがわからないかもしれない。

2. 要介護高齢者のケア方法（表２）

要介護高齢者のケア方法は、38 キーセンス、8 サブカテゴリーから、【既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場の発掘】、【できることで協働し、要介護高齢者の就労の見える化】、【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】という 3 カテゴリーが導かれた。

1）【既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場の発掘】

B 氏が“口論になり怒りをぶつけていた時、好きな買い物で気晴らしするために法人が運営する売店に誘（った）”い（場面 1）、〈ケアの場を限定せずに要介護高齢者が居心地よく力が発揮できる場を探（す）〉した。すると、“売店での就労が負担にならない程度を見極めるために、売店で過ごす時間は少しずつ様子をみながら延ばした”（場面 2）などの〈要介護高齢者の反応を確かめながら就労を試みる〉ことで、【既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場の発掘】するケア方法をしていた。

(場面 2)

B 氏が売店の売り子として活動できる可能性を模索するために、介護サービス利用時に売店で過ごす時間をつ

表1　要介護高齢者の捉え方

場面	要介護高齢者の捉え方はどのようなものかのキーセンテンス	サブカテゴリー	カテゴリー
1	介護サービスの利用者仲間に自分から近づき、同じ話を繰り返し、口論になることがある	口論は人と関わりたい思いの表れであり、他者には拒絶されていない	言動の意味づけの転換
1	介護サービスの利用者仲間にちょっかいを出すことで、口論にもなるが、仲間はずれにされたり、拒絶されることはない		
1	介護サービス利用中に、利用者仲間に、突然怒り出し口論になったとしても、人と関わることを辞めない		
1	介護サービスでは利用者仲間と口論となっても、気分転換のドライブで売店を訪れると、直前の口論が嘘だったかのように不快な気持ちを引きづらない	ケアの場により言動は変化する	
1	売店で過ごしている間は誰かと機嫌が悪くなることはない		
2	売店では怒ることもなく機嫌がよいので、介護事業所にいるよりも介護の手間がかからない		
1	介護サービスを利用中に、おなじ利用者に話しかけ返事がないと怒り口論となることを繰り返しているが、職員の介入で気持ちを収めることができる	当事者が引きずらないことは問題行動ではない	
8	売店では介護事業所と同様に水たまりをつくるほどの尿失禁をするが、客も店長も困らせることはないので、問題ではない		
8	B氏が売店で尿失禁をすることに気づかないこともあるが、気にしていないので問題ではない		
8	尿失禁をしていることを周りに気づかれないように注意しても、B氏は申し訳なさそうな表情をするが、引きづらないので問題ではない		
1	売店までの移動や、レジ、商品管理の業務は担えないが、売店でもっとも重要な接客の役割が担える	島の暮らしで培った能力を見いだし就労に生かす	島で培った本人の力と〝地域性〟への着目
1	同じ話を繰り返すが、おしゃべりは好きであり、売店での接客ができる可能性がある		
1	島の暮らしや島野菜の調理法などを伝える能力が残っている		
5	島の暮らしで培った経験で会話を弾ませたことで、接客した観光客からお礼に手紙やお菓子が送られてくるほど役割を果たせる		
12	B氏は県外での出店にも飛行機にのって参加したが、イベント会場で環境変わっても臆することなくいつものように売り子としての役割を果たしていた		
5	B氏は組織のなかで上司と部下との関係性を意識したち振る舞うことができることから、雇用関係を意識する機能が残されている	要介護状態であっても〝できること〟で雇用関係を築くことができる	
5	B氏は接客により、売店の売り上げに貢献しようとしていることから、就労についての利益の追求を意識する機能が残されている		
4	要介護高齢者であっても、島で暮らしてきた知識や経験を動員した接客をし、雇用契約に応じて、役割が果たせる可能性がある		
2	売店では十分な休憩場所がなく過ごしづらさはあるが、売店で長く過ごすことを希望していることから、思ったより就労にむけた気力や体力がある		
3	要介護状態であっても、売店での売り子ができる存在になれば、賃金は対等な扱いを受けることができる		
1	売店までの移動や、レジ、商品管理の業務は、若い店員が補えば、売り子の役割は担えると思う		
9	売店までの送迎は、介護事業所が依頼に応じてくれるので問題ではない		
2	必要な介護が補えれば、要介護状態でも働ける	島の狭小性を生かし、必要な介護は介護事業所が出張により対処すればよい	
9	身支度に時間がかかることで開店時間に遅れることがあったが、介護事業所と相談し出張により対応したので問題ではない		
10	薬の自己管理ができず、家族の協力も得られないため介護事業所が内服薬を預かっているが、売店の出勤時には店長がその役割を担うので問題ではない		
7	B氏が売り子として役割が継続できるよう、売店での失禁は対処するので問題にならない		
11	B氏は、売店の売り子としての給料を全て売店で使い込み、購入したものをしまいこみ管理にこまっていると家族から苦情があり、金銭管理を手伝っているが、本人が気にすることはない		
3	診療費や介護費用などの経済的支援を必ずしも家族関係が良好ではない息子夫婦に依存しているが、売店で就労することで収入が得られれば、家族関係の変化にも期待がもてる	“できること”が増えれば家族関係も良好に向かう	自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待
4	希望を表出しづらい要介護高齢者であっても、就労によって家族と対等な関係になる		
11	給料で診療費や介護費用にもあてがえるようになったことで、家族の経済的負担が軽減し、家族関係の変化につながっている		
11	B氏は、収入を得たことで、小遣いができ、介護サービス利用者仲間に差し入れをするようになった	“できること”が増えれば他者への気遣いが芽生え支え手になれる	
11	給料が入ることを想定し、売店の商品を買い助けする		
11	給料日には「ありがとうございます」とお礼を述べ、「こんなにあるの」と感謝すると同時に「私だけ？」と介護サービス利用者に配慮ができる		
3	我が事を想定し、要介護状態で問題行動を抱えながらも、就労につなぐ	我が事として要介護状態になっても就労する生き方を学ぶ	
4	要介護高齢者のB氏は介護が必要であっても、ケアによって就労する場をつくることで、最期まで島で過ごせるようになる		
5	B氏が就労することは、ケアを受けながらでも就労することを島の人に示してくれる		
6	島では元気なうちしか働けないという考えが浸透しているので、B氏が経済就労をしていることを一人でも多くの人に伝え、要介護状態でも働ける事例として示す		
3	年金だけでなくケアを受けながらであっても経済的就労につなげる		

くることになった。介護サービスも売店も同じ法人なのでB氏の売店での活動を一日のプログラムに取り入れた。売店の運営に支障がなく、またB氏が嫌がらない程度の時間を見計らって試しており、2時間からスタートして午前中へと時間を延ばしていったが、B氏は全く平気で、穏やかであり、店長との関わりも問題がなかった。あるとき、B氏が昼食を事業所ではなく、売店で食べたいと言い出したので、店長と売店で過ごすことを気に入っていると思えた。それから売店へ弁当を配食することも介護事業所と話し合って決まった。

2)【できることで協働し、要介護高齢者の就労の見える化】

B氏は、売店で定期的に過ごす時間をつくると、“B氏から「売店にもっといたい」という希望があり、昼食も売店に配食してもらえるように、介護事業所と話し合い同意を得た”り（場面2)、“一緒に働く非専門職の店長には、尿失禁で着替えなどの対応に困った時には、いつでも、介護事業所に連絡をすれば対処することを伝えた”（場面7）など〈介護事業所が就労の場に出向いて必要な介護を引き受ける〉ようにした。島で長く暮らしてきた強みから島の暮らしや島野菜の調理法を伝えることができるため、できないことは若い店員が補ってでも売り子として働いてほしいと思ったので、“B氏には売店の接客を担当してもらい、できそうにない商品管理は、若い店員と補い合うよう役割分担し（た)”（場面1）〈補い合いながらできることを引き出（す)〉した。“店長の留守中に観光客の対応に困ったことがあり、港ターミナル内での理解者を探し協力を求め（た)”る（場面7）など〈就労に伴う課題は諦めずに対処（する)〉した。このように、【できることで協働し、要介護高齢者の就労の見える化】というケア方法をしていた。

(場面7)

B氏は、トイレ誘導に応じず、椅子の下に水たまり状の失禁をする光景を目にすることが頻回にあった。B氏が売店で勤務するにあたり、気をつける必要がある注意点を普段関わっている事業所の介護職に尋ねた。動きたがらず運動不足になりがちで肥満傾向にあるので、できるだけ歩かせるようにしたいことと、トイレに行くタイミングを忘れ失禁するのでトイレ誘導の声かけをしてほしいと話していた。事業所の介護職と売店で尿失禁したときの対応について相談した。介護職は、着替えは持参させるが、売店が尿失禁の対応に困ったときにはいつでも訪問する事を約束した。

B氏が売店で働く際の一番の課題は、失禁だったので、介護経験があり、人柄もよい店長にお願いしたいと思った。店長には、尿失禁がありトイレ誘導をしてほしいこと、歩きたがらないのでできるだけ歩く機会をつくってほしいことを説明し、「売店の売り子として面倒みれそうですか？」と尋ねた。店長は、全く嫌な顔ひとつせず了解した。着替えは持参してもらうが尿失禁があって、対応に困ったときには、いつでも遠慮せずに事業所に連絡すれば、すぐに介護職が売店に訪問して対処してもらえることを説明した。見回りで売店に行ったときに、たまたま失禁している場面に遭遇したときは、B氏に声かけし、失禁に対処した。

3)【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】

B氏が売店で就労するためには、店長の理解が必要であり、売店を運営する店長には法人の理念を説き、利益を追求するよりも、高齢者の知恵を生かし必要な支援を行いながら、一緒に働く運営を大事にしていることについて何度も話し合い、〈要介護高齢者が就労にチャレンジできるようキーパーソンをみつけ、何度も確かめ合（う)〉った。また、“B氏が働くことは、家庭内での遠慮を緩和すると思ったので、ボランティアではなく雇用契約を行い、賃金を支払うということを理事会に提案した”（場面3）など〈要介護高齢者が他者と補い合う就労環境を整え（る)〉た。そして、“要介護高齢者であっても、売り子として役割を果たしているB氏の様子を売り子仲間にも共有するために、できるだけ、一緒に働いている店長にその様子を語るように促し（た)”（場面5）〈就労仲間に要介護高齢者と働く意味を馴染ませ（る)〉た。さらに、“B氏の得た収入で診療費や介護費用を支払うことを介護事業所と家族に相談したことで、嫁に「家計が助かる」と喜ばれ（た)”る（場面11）など〈家族に要介護高齢者が就労する価値の気づきを促（す)〉した。“港ターミナルに出入りする島民には要介護高齢者の売り子としての存在を意識的に伝え（た)”る（場面6）という〈要介護高齢者が就労し支え手になっていることを地域住民に啓発（する)〉した。このように、【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】というケア方法をしていた。

(場面3)

B氏と雇用契約は、当然のことながら他のスタッフと同じ最低賃金で契約している。高齢者には若い従業員にできないことをしてもらっているので、要介護高齢者だから、できないことがあるからといって、最低賃金よりも安く雇うべきだとして、そのための給与基準があれば適応するが実際に根拠がない。法人の考え方も同様であり、B氏の最低賃金での雇用については異論なく了承された。もともと、人が生きていくためにはお金が必要であり、地域の高齢者たちの年金生活は、病気で医療が必要になったり、介護が必要になることで費用がかかるようになると、子どもに迷惑をかけているという罪悪感にまでつながってしまう。子ども家族に世話になっているという意識が強すぎると、なにをするにも遠慮していてかわいそうに感じるほどである。子どものいない自分にとっては、年をとり働けなくなって介護が必要になると、他人に迷惑を抱えることになると考えると、惨めな将来しか描けなくなってしまう。この売店での高齢者の活動

表2 要介護高齢者のケア方法

場面	要介護高齢者の捉え方はどのようなものかのキーセンテンス	サブカテゴリー	カテゴリー
1	口論になり怒りをぶつけていた時、好きな買い物で気晴らしするために法人が運営する売店に誘った	ケアの場を限定せずに要介護高齢者が居心地よく力が発揮できる場を探す	既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場の発掘
1	介護事業所では、同じ話を繰り返し口論になったり、時間を持て余したり、できることが生かされないので、売店の売り子として活動することでおしゃべりが好きなことが生かせると期待した		
1	介護事業所ではテレビを見るなどの活動だけで時間を持て余し過ごしていたが、売店では落ち着いていたので、売り子ができるかもしれないと思った		
1	気晴らしをするために出かけた売店では、思いのほか穏やかに過ごせていたので、売り子として働くことを検討するために、売店で過ごす時間を定期的に確保し、反応を確かめた	要介護高齢者の反応を確かめながら就労を試みる	
2	売店での就労が負担にならない程度を見極めるために、売店で過ごす時間は少しずつ様子をみながら延ばした		
2	売店でB氏の接客の様子を確認したら、帰りたいとの発言や退屈した様子もなく過ごせていることを把握した		
4	B氏に「売り子として働いてみませんか」と聞いてみたら、「やってみたい」と乗り気だったので、「給料も支払うよから頑張ってみよう」と伝えた		
5	B氏の勤務の日には、売店を巡回し売店の売り子として就労している自覚を促す機会にした		
7	B氏の様子を伺い、就労への動機づけために介護事業所までの送迎を申し出たり、売店を巡回した		
12	B氏が好奇心が旺盛なことに着目して県外イベントへの参加を促すと、行ってみたいと合意が得られた		
7	一緒に働く非専門職の店長には、尿失禁で着替えなどの対応に困った時には、いつでも、介護事業所に連絡をすれば対処することを伝えた	介護事業所が就労の場に出向いて必要な介護を引き受ける	"できること"で協働し、要介護高齢者の就労の見える化
9	売店の運営に支障がきたすことがないよう、送迎の役割の変更について、介護事業所と相談し対応を依頼した		
2	B氏から「売店にもっといたい」という希望があり、昼食も売店に配食してもらえるように、介護事業所と話し合い同意を得た		
1	売り子にするためには、移動手段が課題になるので、介護事業所と相談し、送迎の活用を依頼し同意を得た		
1	B氏には売店を接客を担当してもらい、できそうにないレジや商品管理は、若い店員と補い合うよう役割分担した	補い合いながら〝できること〟を引き出す	
2	B氏の島の知人への話しかけや、観光客との交流は、B氏のやり方を見守るよう依頼した		
8	尿失禁の場面で非専門職の店長がうまく対処していたので、売店業務において問題になっていないことを確認した		
10	売店の勤務中は、介護事業所が担っていた内服管理の一部を店長が担えるよう役割移譲に合意が得られた		
7	店長の留守中に観光客の対応に困ったことがあり、港ターミナル内での理解者を探し、協力を求めた	就労に伴う課題は諦めずに対処する	
11	お金の管理をしたことのないB氏は、給与の管理ができないという新しい課題が発生したので、給与の使い途について、お金の動きを情報収集した		
8	売店で尿失禁することがあっても、売店でうまく対処され、誰からも苦情がないことを把握した		
1	家族介護経験がある売店の店長なら、B氏の受け入れが可能と考えたので、通いのプログラムに売店で過ごす活動を提案し同意を得た	要介護高齢者が就労にチャレンジできるようキーパーソンをみつけ、何度も確かめ合う	"支えられながら支え手になれる"地域の土壌づくり
1	昔の暮らしが記憶として残され、同じ話を繰り返すことは、売店での接客の可能性があることを店長へ伝え、法人の理念（高齢者が楽しみながら暮らしの知恵が生かせる就労の場）を実現する当事者として推薦できることを話し合った		
2	売店でB氏の見守り役となる店長と常に話し合い、B氏に期待する役割は島の高齢者として観光客に島の紹介をし、B氏が楽しむことであると確認しあった		
4	売店の運営に影響する店長には、売店の理念（高齢者が楽しみながら暮らしの知恵が生かせる就労の場）を説き、高齢者の知恵を生かし必要な支援を行いながら、一緒に働く運営について何度も話し合った		
3	B氏が働くことは、家族内での遠慮を緩和すると思ったので、ボランティアではなく雇用契約を行い、賃金を支払うということを理事会に提案した	要介護高齢者が他者と補い合う就労環境を整える	
3	自らの老いと重ね合わせて、年金に加え、就労により、経済的自立のモデルとして、できないことは他者で補い、できることを生かせる就労環境をつくるために理事会に提案した		
12	B氏に挑戦する活動の機会となれるよう県外でのイベント出店で売り子として参加することを法人の理事会と家族に提案し合意を得た①		
4	理事である診療所看護師とは、理念の実現のために、B氏がその候補者になったことを伝え、売り子として役割が担えるように相談した		
4	売店での介護環境を整えるために、診療所看護師と一緒に段取りをした		
4	要介護高齢者のB氏を紹介し、できることとできないことを伝え、就労仲間として受け入れて欲しいと売店のミーティングで提案した	就労仲間に要介護高齢者と働く意味を馴染ませる	
5	店員仲間には、高齢者を就労仲間にすることの大事さを毎月のミーティングで話題にした		
5	売り子仲間になった店員にはできないことを補い合うことで仲間として加わることができることを繰り返し説明した		
7	B氏が売店で尿失禁により着替えや片付けが必要であっても、法人の理念があることを売店のミーティングなどで機会あるごとに伝えた		
5	要介護高齢者であっても、売り子として役割を果たしているB氏の様子を売り子仲間にも共有するために、できるだけ、一緒に働いている店長にその様子を語るよう促した		
11	B氏の得た収入で診療費や介護費用を支払うことを介護事業所と家族に相談したことで、嫁に「家計が助かる」と喜ばれた	家族に要介護高齢者が就労する価値の気づきを促す	
12	B氏に挑戦する活動の機会となれるよう県外でのイベント出店で売り子として参加することを法人の理事会と家族に提案し合意を得た②		
6	売店は港ターミナルのなかにあり、船の待合席が隣接しているので、出入りする島民に高齢者ための売店であることをポスターで掲示しPRした	要介護高齢者が就労し支え手になっていることを地域住民に啓発する	
6	港ターミナルに出入りする島民には要介護高齢者の売り子としての存在を意識的に伝えた		

①②：ひとつのキーセンテンスを異なる観点からサブカテゴリー化したものである。

を仕事として認めていきたいのは、高齢者がどんな状態になっても経済的に自立できるチャンスがつくれて、遠慮のない暮らしの実現につながると期待しているからである。また、高齢者の暮らしは自分の将来の暮らしだと思えるから、要介護状態になっても、働くことができ、高齢者の経済的な自立を助ける地域になって、将来の準備になればいいとも考えている。

(場面5)

売店が高齢者のための売店であるという立ち上げの趣旨については、毎月開かれる従業員同士のミーティングで伝える機会をもっている。また、売店にその理念は目につくように看板に書いてある。島には就園前の2歳以下の子どもを抱えて出来る仕事は限られており、そのなかで売店はそれができる貴重な仕事である。それが目当てで入ってくる人達も少なくないので、高齢者のための売店であることが知られていない。新入りの従業員には、かならず高齢者のための売店であるという趣旨を説明している。毎月の従業員のミーティングに全員が参加することはないが、ミーティングでは、高齢者というワードを忘れないようにしてほしいと思い、「高齢者から仕入れている商品増えましたか？」「高齢者が店に立ち寄っていますか？」と必ず聞いている。以前は、私も土日は売店の売り子として店番をしていたが、最近はその機会が少なく、自分が船に乗るときや用事があるときのついでにというタイミングでしか売店にいく機会がない。ミーティング以外には、従業員に伝える機会はないし、売り子さんはついつい、売り上げに気をとられてしまいがちなので、「高齢者をつなぎ止める方法を考えましょう。みなさん。」というように、原点に戻していくことをしている。私が会計を担っていることもあるので、「今日は売り上げがあんまりで・・」と顔をみると言われることもあるが、「売り上げは別にいい。高齢者はどうですか？」と問い返すと、誰々さんが船にのる前に立ち寄ってくれましたという報告もあるので、「アピールしておいてね」というような会話をしている。

Ⅳ．考察

通所介護を利用していたB氏を就労につなげた支援者の実践について、要介護高齢者の捉え方とケア方法から導かれた地域ケアへの貢献の可能性は以下のとおりであった。

1. 問題行動ではなく強みとして捉える対象の捉え方

要介護高齢者の【言動の意味づけの転換】、【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】、【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】の捉え方から問題行動ではなく強みとして捉える対象の捉え方を考察した。

要介護高齢者の【言動の意味づけの転換】の捉え方には、問題行動となっていた〈口論は他者と関わりたい思いの表れであり他者には拒絶されていない〉と捉え直し、〈当事者が引きづらないことは問題行動ではない〉という言動の意味づけを転換する視点があった。問題行動とは、誰にとっての問題なのかを問えば、要介護高齢者の問題行動をつくるのは支援者の捉え方次第であるといえる。

要介護高齢者の【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】の捉え方には、〈島の暮らしで培った能力を見いだし就労に活かす〉、〈要介護状態であっても〝できること〟で雇用関係を築くことができる〉という捉え方で本人の力に着目する視点と、〈島の狭小性を活かし、必要な介護は介護事業所が出張により対処すればよい〉という捉え方で互いに補い合う力に着目する視点があった。〝地域性〟を生かした要介護高齢者の就労は、認知症により、役割機能を失いながらも、共に生きる構成員のひとりとして、島民と助け合う力に着目したことであると考えられた。

要介護高齢者の【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】の捉え方には支援者自身が当事者になることで、信頼と期待を抱いていた。支援者は、介護の専門職ではないが、10年あまり、島の住民とともに暮らし、地域活動やNPO法人で役割を果たしてきた。また、高齢者が活躍すること趣旨とした売店の管理者として、その実現に向けて、要介護高齢者の就労に対するモチベーションが基盤にあり、権限もある立場であると考えられる。これは、専門職としての資格に関係なく、就労支援を通して、地域ケアの担い手になれることを示している。このことは、支援者は、専門職の立場で誰かのためにケアするのではなく、当事者として自分のためにも取り組むという考え方があったといえる。上野（2013）は、当事者をニーズの主体とし、石垣(2012)は老年看護学において当事者性を取り入れることの必要性を述べている。

問題行動ではなく強みとして捉える対象の捉え方は、要介護高齢者の問題行動を個性として捉え直し、認知症により役割機能を失いながらも共に生きる構成員のひとりとして、島民と助け合う力に着目し、支援者自身も当事者として重ね合わせていたことであった。

2. 〝地域性〟を生かし、協働でとりくむケア方法

【既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場の発掘】、【できることで協働し、要介護高齢者の就労の見える化】、【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】のケア方法から〝地域性〟を生かし、協働でとりくむケア方法を考察した。

〈ケアの場を限定せずに要介護高齢者が居心地よく力が発揮できる場を探（す）〉し、〈要介護高齢者の反応を確かめながら就労を試みる〉というケア方法は、要介護高齢者の力が発揮できる環境の力を生かしていた。要介護高齢者のケアの場については、小規模化・個室化のユニットケアはなじみの関係がつくられる、利用者同士の交流がふえる等の有効性が実証され、2002年制度化さ

れた（医療経済研究機構,2001)。そして、グループホームや小規模多機能型居宅介護という介護単位の小規模化につながっていることから、場のもつ力という環境への着目がケアに生かされている。また、2001年のWHOの総会で採択された国際生活機能分類では、生活機能を心身機能・構造、活動、参加のレベルで捉え、その背景には環境因子と個人因子があるとしている（上田,2005)。このように、要介護高齢者の力という個人因子と場のもつ力という環境因子に着目し、生活機能、特に、活動と参加にアプローチしたケア方法は、要介護高齢者ケアにも貢献していると考えられた。

〈介護事業所が就労の場に出向いて必要な介護を引き受ける〉、〈補い合いながら〝できること〟を引き出す〉、〈就労に伴う課題は諦めずに対処する〉というケア方法は、B氏を含めて互いによく知り合っている島の人が、それぞれのできることを出し合って補い合い、課題には工夫して取り組んでいたといえる。H島の主産業である農業は、古くから「ゆいまーる」の慣習による相互の助け合いによって営まれてきた。また「離島・過疎地域支援事業」において、H島の住民は高齢者個々の抱える課題を自らの課題として主体的に取り組み、できることで支え合ってきた実績がある（大湾,2021)。これは、「離島・過疎地域支援事業」が要介護高齢者の就労支援にも応用されていると考えられた。

今回の要介護高齢者の就労が実現することで、【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】のケア方法につながったといえる。Covey（1990/1996）は、相互扶助について、人間の発達を「依存」から「自立」、「自立」から「相互依存（Win-Win)」への成長過程ととらえており、「自立」した者のみ「相互依存（Win-Win)」ができると述べており、今回のケア方法は「相互依存(Win-Win)」の過程にあるといえる。

〝地域性〟を生かし、協働でとりくむケア方法は、要介護高齢者の個性が発揮できるようケアの場を拡げ、島民とともに発掘することで、誰でも支え手になれる人づくりであった。

3. 地域共生社会をめざした地域ケアへの貢献

要介護高齢者の介護予防活動における就労支援の具現化による看護職者の役割拡大のために、要介護高齢者の就労支援の事例にみる地域共生社会をめざした地域ケアへの貢献の可能性を考察する。

要介護高齢者の就労支援は、通所介護における地域ケア（Care in the Community）から通所介護の出張サービスに加え、地域にある売店の店長や店員、近隣店舗の店員、家族、介護サービス利用者仲間、NPO法人の関係者、利用客など多様な人々による地域ケア（Care by the Community）に発展してきたと考えられた。地域ケアにおいて、要介護高齢者の介護予防活動における就労支援というチャレンジ的な支援は、保健医療福祉の多様な専門職と非専門職のチームによって行われ、看護職者のみとは限らない。本研究の支援者は、非専門職であったが、高齢者が活躍すること趣旨とした売店の管理者として、その実現に向けて、権限も要介護高齢者の就労に対するモチベーションがあったことから、その基盤となる考え方が重要であると考える。

とりわけ、要介護高齢者は、看護職者の多くが支援者として働く介護予防活動の場で把握される。特に、個別支援による継続支援ができる看護職者が関与することで、要介護高齢者の介護予防活動を就労にする支援は推進できうると考える。看護職者の役割は、要介護高齢者の介護予防活動を健康づくりや生きがいづくりで完結させず、就労を志向することである。それは、要介護高齢者を介護予防活動の場にとどめず、地域にある就労の場につなげていくことで地域共生社会をめざした地域ケアへの貢献の可能性が見いだせると考えられた。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、要介護高齢者が地域で就労している1事例に焦点をあてて、その実践から地域ケアへの貢献の可能性を導いた。その実現の中心的な役割を果たした支援者は、高齢者が活躍をすることを主旨とした売店の管理者である非専門職であり、稀有な実践であることは否めない。本研究の限界は、1事例の分析であったため、要介護高齢者が就労を実現する地域ケアを捉えるには限界がある。今後の課題は要介護高齢者への就労支援の実践事例をあつめ、要介護高齢者の就労支援を志向するに至る基盤となる考え方を導くことである。

Ⅴ．結論

1. 対象の捉え方は、【言動の意味づけを転換】、【島で培った本人の力と〝地域性〟への着目】、【自身のモデルとして〝人は誰でも支え手になれる〟という信頼と期待】が導かれた。
2. ケア方法は、【既製に囚われず要介護高齢者の新たなケアの場を発掘】、【できることで協働し、要介護高齢者の就労の見える化】、【〝支えられながら支え手になれる〟地域の土壌づくり】が導かれた。
3. 要介護高齢者の就労支援の事例にみる地域ケアへの貢献は、問題行動ではなく強みとして捉える対象の捉え方で、〝地域性〟を生かし、協働でとりくむケア方法により実現する可能性が導かれた。

謝辞

本調査に快くご協力くださいました研究参加者に心よりお礼申し上げます。

なお、本研究は令和2年沖縄県立看護大学大学院博士後期課程の博士論文の一部に加筆・修正を加えたものであり、山路ふみ子専門看護教育研究助成基金より助成を受けました。また、論文の一部を日本ルーラルナーシング学会第16回学術集会で発表しました。

引用文献

Covey SR. (1990) / スキナ J, 川西 茂訳 . (1996). 7つの習慣；成功には原則があった！（初版）, 253-257, キングベアー出版 , 東京.

医療経済研究機構 .(2001). 介護保険施設における個室化とユニットケアに関する研究報告書 , 2001.

石垣和子 .(2012). “当事者学”に触れて見直す老年看護学 , 老年看護学会誌 , 17(1), 5-11, 2012.

岩永俊博 .(1995). 地域づくり型保健活動のすすめ , 21-25, 医学書院 .

小林江里香 .(2015). 高齢者の社会関係・社会活動 , 老年精神医学雑誌 , 26(11), 1281-90.

高齢者介護研究会 .(2003). 2015 年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～ . https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3.html (2022 年 12 月 23 日現在).

Levasseur M, Richard L, Gauvin L, Raymond E.(2010). Inventory and analysis of definitions of social participation found in the aging literature: proposed taxonomy of social activities. Soc Sci Med, 71(12), 2141-2149.

Michael Bayley.(1973). Mental Handicap and Community Care : A Study of Mentally Handicapped People in Sheffield, Routledge and Kegan Paul,International Library of Social Policy. Cambridge University Press: 20 January 2009.

大湾明美 .(2021). 島に学ぶ地域ケア 高齢者の豊かな人生を創る発想の転換 , 74-106, オフィスコオリノ , 東京 .

Rowe JW, & Kahn,R.L.(1998). Successful aging: The MacArthur Foundation study(pp.1-6). A Dell Trade Paperback.

上田敏 .(2005). ICF（国際生活機能分類）の理解と活用―人が「生きること」「生きることの困難（障害)」をどうとらえるか , 5-70, きょうされん .

上野千鶴子 .(2013). ケアの社会学・・・当事者主権の福祉社会へ , 65-84, 東京大学博士論文 .

山口初代 , 大湾明美 , 田場由紀 , 砂川ゆかり , 赤星成子 .(2018). 看護職者による介護予防に関する国内文献の検討 . 沖縄県立看護大学紀要 , 19, 31-38.

Contribution of employment support for older individuals requiring long-term care to community-based care: From actual cases highlighting perspectives toward care recipients and care methods

Hatsuyo Yamaguchi[1)], Akemi Ohwan[1)], Yuki Taba[1)], Yukari Sunagawa[1)]

Abstract

This study aimed to analyze cases of employment support for older individuals requiring long-term care in order to clarify perspectives toward care recipients and care methods and to discuss the possibility of contributing to the community-based care, thereby expanding the role of nurses through implementation of employment support as part of activities to prevent frailty in older individuals. Participants were individuals who provided employment support to older individuals requiring long-term care. Semi-structured interviews were carried out with the participants, and their answers regarding their perspectives toward care recipients and care methods for older individuals requiring long-term care were analyzed in a qualitative and inductive manner. [A shift in the meaning of words and behavior], [emphasis on older individuals' strengths from "locality" on an island], and [trust and expectation that "everybody can help somebody"] were derived for perspectives toward care recipients, and [discovering new situations to provide care for older individuals requiring long-term care, without being restricted by existing systems], [visualizing employment of older individuals requiring long-term care through collaboration where possible], and [cultivating a community where people who are helped can help others] were derived for care methods. Thus, such contribution to community-based care observed in cases of employment assistance for older individuals requiring long-term care can be achieved by regarding the care recipients as strengths, not as problems, and by using care methods that employ "locality" and collaboration.

Key Words: older individuals requiring long-term care, employment, community-based care

1) Okinawa Prefectural College of Nursing